まえがき　1

第一章　吉本隆明の出発　11

Ⅰ　東京府立化学工業学校時代　11

最初の詩／少年時代の終わり／若き三島由紀夫の詩／自己表出／『論語』、啄木／ふたたび『論語』、そして老子／下町の時間の流れ／受容的自然観

Ⅱ　米沢高等工業学校時代　27

回覧雑誌『からす』／「巻頭言」／「白い花」／小林秀雄の古典論

第二章　詩集稿『呼子と北風』の編纂時期をめぐって　36

Ⅰ　編纂時期について　36

Ⅱ　配列について　39

Ⅲ　公表過程　43

Ⅳ　残された原稿束　46

Ⅴ　残された問題　48

完成度という基準／表題について／作品配列について

Ⅵ　内容的検討の必要性　53

Ⅶ ふたたび編纂時期について　55

第三章　詩集稿『呼子と北風』の形成過程　57

Ⅰ 宮澤賢治との出会い　57
進学の理由／みちのくの街／花巻への旅／賢治をいつ読んだのか？／「雨ニモマケズ」

Ⅱ 賢治探究の進展　66
「イギリス海岸の歌」／作品探究のはじまり／「山の挿話」／「郷愁」／「朝貌」／東北の風光／表記の模倣／「かぶと山と虚妄列車」／影響の深まり

Ⅲ モダニズム　87
「北風」／今氏塾の少年詩人たち／田村隆一の最初期の作品／鮎川信夫の「寒帯」／鮎川信夫の「夕暮」／「悲哀のこもれる日に」

Ⅳ 宮澤賢治の影響　99
「呼子」／賢治の「無声慟哭」／賢治の「永訣の朝」／「続呼子」

第四章　吉本隆明の戦争詩　109

Ⅰ 戦争詩の問題　109

戦争詩の制作／『草莽』の編纂／「帰命」／賢治の影響／兄の戦死／賢治の「河原坊」／挽歌？

II 『呼子と北風』の戦争詩 121

三好達治の戦争詩／高村光太郎の戦争詩／最初の戦争詩／アッツ島を歌う光太郎／アッツ島を歌う三好／秋山清の「白い花」／「ワタシノ歌」／三好達治の「十柱の神」／「祖国」と「われ」のあいだ／日本列島

III 『草莽』の戦争詩 143

「草莽」の語／「序詞」／「草ふかき祈り」／国家と自己／歴史／悲しい石／国土

第五章 死にむかいあう日々 159

I 東京工業大学への進学 159

一九四五年五月の手紙／「哀しき人々」／宮澤賢治の影響

II 「雲と花との告別」 166

雲と花の会話／賢治の影響——語彙／神々／賢治の影響——受容的自然観

III 立原道造の影響 175

四季派／日本浪曼派／芳賀檀
Ⅳ 立原道造の「かろやかな翼ある風の歌」 181
風になった青年／暴風雨／さびしい心／浅間の山や軽井沢／『日時計篇』
第六章 敗戦前後——保田與重郎理解をめぐって 191
Ⅰ 戦争をどう見たか 191
愛国少年／今氏乙治の教え／戦略的発言／花田清輝との論争
Ⅱ さらなる宮澤賢治探究 197
そぼくな疑問／宮澤賢治への関心／三冊のノート／時代の児
Ⅲ 保田與重郎 204
英雄と詩人／系譜という観念／保田の「宮澤賢治」／保田における系譜観念の転換
Ⅳ 保田の二つの系譜観 211
モダニストとしての保田與重郎／実体的系譜観念の否定／文学的文脈
Ⅴ 隠遁詩人という観念 216
宮澤賢治の「告別」／隠遁詩人

Ⅵ 保田與重郎からの離脱 220
アジア的と非アジア的／宮澤賢治論のその後

第七章 小林秀雄からの脱出 226

Ⅰ 敗戦直後の模索 226
「習作廿四（米沢市）」／宮澤賢治論の放棄／小林秀雄への傾斜

Ⅱ 「詩と科学との問題」 231
『詩文化』／モダニズム批判／遠山啓の自主講座／小林の「ランボオⅢ」／父親殺し／小林のモチーフ、吉本のモチーフ

Ⅲ 「ラムボオ、マルクス論」 243
敗戦直後のマルクス理解／小林秀雄のマルクス理解／情熱／ダンテの言葉／勇躍の表象／社会変革／宿命／吉本の資質／革命

Ⅳ 「反ヴァレリイ論」 260
小林とヴァレリー／休職、そして大学院／集団のロマンチシズムと集団のリアリズム／共同幻想という観念の芽生え／ふたたび虚無／パスカル／三木清／小林秀雄との別れ

あとがき 277